

# 「あつぎアートギャラリー」での個展開催を通して — 個展における造形教育との関わりと可能性 —

大塚 習平<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学保育学科

## 【抄録】

本稿では2014年に新設された「あつぎアートギャラリー」での個展開催を通し、厚木市民はじめ、学生や教職員、その他多くの方々に、テラコッタ彫刻作品鑑賞の機会を提供する事によって、美術に親しみ愛好する心情を育てる事を試みた。そして作家自身が作品を顧みることによって、今後の方向性について考える機会とした。

## 【キーワード】

美術教育 立体造形 テラコッタ彫刻 鑑賞教育 生涯学習

筆者は「ものを生み出す」事を通して人間形成や陶冶を行う「造形教育」に携わっている。そして「造形教育」は、自らが制作活動を実践する事によって具体的に、より説得力を持つ事に繋がると考え、立体作品制作を25年に渡って継続してきた。また制作活動と並行して、全国公募展<sup>1)</sup>や地方展<sup>2)</sup>、ギャラリーにおける個展<sup>3)</sup>やグループ展<sup>4)</sup>、そして大学図書館<sup>5)</sup>等において、作品発表の場を作り出してきた。

本稿では、2014年新設された「あつぎアートギャラリー」<sup>6)</sup>での個展開催を通し、厚木市民はじめ学生や卒業生、教職員、その他多くの方々に立体作品鑑賞の機会を作り、さらに作家自身が、今後の立体制作の方向性について考える一つの機会としてまとめている。また前回の大学図書館に

引き続き、アンケート調査を実施した結果、鑑賞者が本展覧会を観て、彫刻作品や素材への興味・関心を深め、今後の美術鑑賞へのきっかけとした事が明らかとなった。

## 1. はじめに

「美術」について向き合う事は、「豊かな情操を養」<sup>7)</sup>い、人生をより充実したものにするとされている。筆者自身、これまで絵や写真や立体作品を鑑賞する事によって、時間や空間を超え、作家のものの見方に共感したり、発見があったり、励まされたり、癒されたりした記憶がある。そして、このような体験は多くの人々に共通した認識といえる。

ただし、筆者が専門とする立体作品に関しては、平面作品と比較して目にする機会も乏しく、「彫刻」というジャンルがある事さえ知らずにいる人

---

<連絡先>

大塚 習平 otsuka@shohoku.ac.jp

もいる事を、大学の授業や「あつぎ協働大学」<sup>8)</sup>などを通して知り得た。

そこで筆者は1st stageとして、2012年「テラコッタ彫刻in湘北短期大学図書館」を開催し、学生や教職員が「美術」、特に「立体像形」について興味・関心を持ってもらえるよう試みた。その際、アンケート調査により、その目的は一定のレベルで達成された事が明らかとなった。

さらに2nd stageとして「あつぎアートギャラリー」において、市民に向け個展を開催する事により、一般市民が広く立体造形に親しめるための、新たなきっかけ作りとした。

## 2. 展示作品について

個展で展示した作品は以下の通り。

「残されたかたち」(図1) 材質はterracotta、石膏、木。着彩は胡粉、金箔、アクリル絵の具、オイルステインによるもの。大きさは、高さ1m60cm(台座含)、幅60cm、奥行60cmである。2009年「湘北短期大学学内研究助成金」を得、Itaria Firenze近郊のSt. Fiorentinaにある「Terra Gaia工房」にて制作したもの。台座はTerra Gaia工房から、船便で送られて来た際、本体を梱包していた箱材で、その風合いを活かして制作したもの。2010年「第65回記念 横浜美術協会展」に出品し、「協会賞」ならびに「はまぎん産業文化振興財団賞」を受賞した。

「雲をまとう人」(図2) 材質はTerracotta、木によるもの。着彩は弁柄、胡粉、日本画の顔彩。大きさは高さ30cm、幅20cm、奥行15cmである。2013年「第2回緑の中の小さな彫刻展」に出品した。北国の長く寒い冬の、数少ない晴天の日に、ぽっかりと浮かんだ雲と、ダブルのコートを着て外出した女性の、晴れ晴れとした気持ちを合わせて表現した。

「雲の記憶 一臨一」(図3) 材質はTerracotta、木。着彩は胡粉、アクリル絵の具、オイルステイン。大きさは、高さ50cm、幅30cm、奥行き30cmである。2012年「第1回 緑の中の小さな彫刻展」に出品した。椅子に座す少女が空を見上げている人体像と空に浮かぶ雲との間の、空間の広がりイメージして表現した。コートには顔彩による着彩を施し、赤、青、黄色が見る角度により見え隠れするよう工夫した。

「風と雲と希望と」(図4) 材質はTerracotta、木、胡粉、アクリル絵の具によるもの。大きさは高さ90cm、幅40cm、奥行30cmである。2011年「第6回横浜美術協会展 春季受賞者展」に出品。人物はなるべくシンプルな形とし、吹いてくる風を髪と雲の動きで表した。背景には空に続いて行く階段を配し、上昇感を表した。

「旅の記憶」(図5) 材質はTerracotta、石膏、木、顔彩、金箔によるもの。UK西端の都市St. IvesにてBerbra Hepworth美術館と近くの海辺で見た風景がモチーフとなっている。2014年「横浜美術協会会員・受賞者展」に出品。現在、個人蔵となっている。

「雲の記憶」(図6) 材質はTerracotta、石膏、木、金箔によるもの。大きさは、高さ1m80cm、幅60cm、奥行き60cmである。2010年「第66回横浜美術協会展」に出品。「横浜美術協会賞」受賞作品。現代に生きる我々と同様に古代の人が空を見上げ、生きていた姿を想像しながら制作した。テラコッタの「風化したような」テクスチャを生かした作品を生み出したいと考えている。

「雲の記憶 一祈人一」(図7) 材質はTerracotta、石膏、木、金箔によるもの。大きさは、高さ1m40cm、幅1m40cm、奥行き70cmである。2011年「第65回二紀展」に出品。初めて制作した座像。彫刻を座らせる台座は、鑑賞者も座れるようにしてある。そのため作品は、受容的雰囲気を持ち、

学内での記念撮影スポットとなったようだ。アンケート結果でも多くの人の好評を得た作品。

「木漏れ日の記憶」(図8)材質はTerracotta、石膏、木、顔彩、金箔によるもの。大きさは、高さ70cm、幅50cm、奥行き40cmである。2013年「第69回横浜美術協会展」に出品。半等身大の像を、心材無しの輪積み成型法により制作した。型を使用しない輪積みによる制作は、本作品が初めての試みであった為、肉厚となり、比較的重量のある作品となってしまった。杜の中からひょっこり現れたタヌキをイメージして制作した。現在、湘北短期大学6号館ロビーの壁面展示コーナーに設置され、学生はじめ教職員がいつでも鑑賞できるようになっている。

「双眸」(図9)材質はTerracotta、石膏、木によるもの。着彩は弁柄とオイルステインによる。大きさは、高さ70cm、幅50cm、奥行き40cmである。2007年「神奈川二紀 受賞作家展」に出品。雪国で冬によく見られる風景を形にした。寒さに耐えながら、両手をコートポケットに入れ、静かに遠くを見据える人のかたち。像全体としてsymmetryな構成と正面鑑賞性により緊張感を持たせ、目や口をシンプルな形に彫り貫き、さらに表面を砥石で削る事で表情を消した事により、鑑賞者に石仏のようなイメージを与えている。

「雲をかぞえる人」(図10)材質はTerracotta、石膏、木である。着彩は弁柄、金箔、オイルステイン。大きさは、高さ2m、幅2m、奥行き1m50cmである。2009年「第63回二紀展」に出品。等身大に木彫の背景を配した試行的作品。背景に雲を透かし彫りし、空間感や絵画的要素を盛り込み、物語性を感じさせるよう工夫した。

「雲の記憶 一秋日一」(図11)材質はTerracotta、石膏、木。大きさは、高さ50cm、幅30cm、奥行き30cm。2013年銀座ギャラリーで開催された「二紀同人展」に出品。和装した人体に取り組んだ作

品。洋服に比べ、和服の直線的なラインと、和服により生み出される大きな面による構成が、面白い表現に繋がったように思う。祖母が他界した年に制作した作品。

「雲の記憶 一秋空一」(図12)材質はTerracotta、木。着彩は弁柄、さびカラー、オイルステイン。2007年「神奈川二紀展」受賞者展である「SOUKI TEN」に出品。上半身は立体像だが、下半身から足にかけてはレリーフによる表現に近付けるといふ、組み合わせによる面白さを表現しようとしたmaquette作品。

「雲の記憶 一窓一」(図13)材質はTerracotta。着彩は胡粉、アクリル絵の具。2012年「第1回 緑の中の小さな彫刻展」に出品。窓辺の廃墟のような背景と女性像を組み合わせる事で、懐古的表現を、さらに、雲を有り得ない位置に配置する事によって、時間と空間の広がりを生み出す事を試みた。

「NANA」(図14)材質はTerracotta。着彩は弁柄、さびカラー、胡粉、顔彩。共同研究<sup>9)</sup>の為、作品制作依頼を受け、依頼者宅の愛犬の写真モチーフとして制作した。「頭部レリーフ」から制作を始め、「体全体のレリーフ」を制作し、最後に「立体作品」を制作した3部作である。

現在、3点とも個人蔵となっている。

「トルソⅡ」(図15)材質はTerracotta、木。着彩は弁柄、顔彩、胡粉、さびカラー、英字新聞。男性のトルソをレリーフで表現した。Terracottaと木の質感の違いや、背景にRaffaelloの聖母を配置した事により、鑑賞者に様々なイメージを喚起させる事を試みた。

「雲の記憶 一空人一」(図16)材質はTerracotta、石膏、木。着彩は弁柄、顔彩、金箔、胡粉。2012年「横浜美術協会受賞者・会員展」に出品。Terracottaによる台座を高く設定し、先端部分に雲をひっかける事により、天空の世界に座する人を表現した。

「海の記憶」(図17)材質はTerracotta、石膏、木。着彩は弁柄、顔彩、さびカラー。堤防に座する人と犬の風景を切り取った作品。

「雲人」(図18)材質はTerracotta、木。着彩は顔彩、胡粉。Henry Mooreの空間表現と雲の表現を組み合わせた人体像。

「風の記憶」(図19)材質はTerracotta、木。着彩は弁柄、顔彩、胡粉。2014年 秦野市で開催された「峠のアート展」<sup>10)</sup>に出品。干支に因んだデザイン。全体としては壺の様な形で、馬の力強い形態と、女性の髪や衣服により下から上へと巻き上げるような風の流れを表現した。現在、個人蔵の作品。

「雲の記憶 一月夜一」(図20)材質はTerracotta、木。着彩は弁柄、顔彩、胡粉、金箔。2012年「緑の中の小さな彫刻展」に出品。2体の人体像と2つの山を背景に配置し、組み合わせている。2つの山を繋ぐために雲と月を用いた。

### 3. アンケート調査について

今年から設置された公共施設「あつぎアートギャラリー」での個展開催にあたり「どのような人が足を運んでくれたのか」「展示についてどんな感想を持たれたのか」「立体造形に興味・関心を持って頂けたか」について明らかにするため、アンケート調査をおこなった。

結果は以下の通り。

アンケートに答えていただいた方は78名。年代層は、10代が6名、20代が6名、30代が8名、40代が13名、50代が9名、60代が24名、70代が10名、80代以上が1名(計78名)で、60歳代が一番多かった。

性別は、男性が40名、女性が38名(計78名)で、ほぼ同数であった。

鑑賞者の住む地域については、厚木市内が35名、厚木市以外が43名(計78名)であった。厚木市以外の内訳は多い順に、相模原市が6名、伊勢原市が5名、秦野市が3名、横浜市が3名、綾瀬市が3名、小田原市が2名、平塚市が2名、海老名市が2名、座間市が1名、藤沢市が1名、町田市が1名、寒川市が1名、川崎市が1名、だった。同じく県外も多い順に並べてみると、東京8名(稲城市、町田市、八王子市、墨田区、江東区、板橋区、世田谷区、中野区)、静岡県2名、千葉県1名、群馬県1名であった。

次に「展示についてどう思うか」について質問したところ、「良い」が71名、「良くない」が0名、「分からない」またはノーコメント7名(計78名)であった。

「良い」の主な理由は、以下の通り。

#### ① 会場に関するコメント

- 「白い壁とライティングが良い」
- 「静かな空間で観る事ができた」
- 「穏やかでゆったりとした時間が流れている」
- 「不思議な空間、感覚で面白かった」
- 「大作、小品、レリーフまで展示された」
- 「彫刻を観る機会があるとは思わなかった」
- 「また厚木で展示会をお願いしたい」
- 「厚木に美術館をつくって欲しい」
- 「記念撮影できるスポットがあって良かった」

#### ② 作品に関するコメント

- 「雲というモチーフを多用している事で観点の面白さを感じた」
- 「素朴さとモダンさが融合した美しさ」
- 「手足が本物みたいで今にも動き出しそう」
- 「独特の世界観が美しい」
- 「人柄があらわれている」
- 「新鮮な気持ちになれた」
- 「一点一点雰囲気があって良い」

「あつぎアートギャラリー」での個展開催を通して

「バリエーションがあって面白かった」

「雲、風が良く表現されていた」「独創的」

「雲、風、木、海の記憶が呼び覚まされた」

「柔らかい感じが良い」

「雲を眺めている表情がとても良い」

「空や雲に魅かれる」

「何かを感じさせるものがある」

「動物の作品をもっと増やして欲しい」

「彫像の視線が重要な表現要素だと感じた」

③ 作品の材質に関するコメント

「土の質感を生かしたところが良いです」

「土の質感に金が効いていて素敵」

「表面の色合いが面白い」

「写真とは全く異なる色合いや風合いが良い」

「背景の木とのバランスが面白い」

「石膏と木との組み合わせが素敵」

「テラコッタの優しい質感とダイナミックな造形の組み合わせが面白い」

「テラコッタに彩色でとても良い」

④ 鑑賞者に関するコメント

「作家と直接接する事ができた」

「穏やかになれた」「幸せな気持ちになれた」

「作家の作品をまとめて観る事ができ、共通にあるイメージを感じる事ができた」

「色々な作品を観て想像が膨らんだ」

「小さい頃に見たものを思い出した」

「外国に行った様な不思議な気分になった」

「前にも観た作品だったので懐かしかった」

「すごい先生に教えて頂いたのだと思った」

また、「ノーコメント」とご回答いただいた方の理由は以下の通り。

「見せ方をもっと考えても良いのではないか」

「作り方とか、分からない事がいっぱいだから」

「人の意見よりも自分が何を表現したいのか考えるべき」「キャプションの位置が悪い」

次に「鑑賞者が1年の内どのくらい展覧会に訪れるか」について聞いてみたところ、0回が8名、1回～2回は21名、3回～5回は19名、6回～10回は13名、それ以上は12名、不明が5名（計78名）であった。

次に「厚木市にギャラリーや美術館等の展覧会場がある事についてどう思うか」質問してみたところ、「良い事だと思う」が76名、「無くても構わない」が0名、「わからない」が0名「不明」が2名で、会場に足を運んで下さった方々はほぼ全員が「良い」という意見であった。

次に、展覧会で展示された作品に関し、「気に入った作品があるか」質問したところ、以下の様な結果となった。

①「雲をまとう人」(図2) 16票

②「雲をかぞえるひと」(図10) 15票

③「雲の記憶」(図6)「双眸」(図8) 13票

④「風の記憶」(図5)「雲 一秋日」(図11) 10票

⑤「残されたかたち」(図1)「雲 一祈人」(図7)

「雲の記憶 一月夜」(図20) 9票

⑥「風と雲と希望と」(図4) 8票

⑦「NANA」(図14) 7票

⑧「双眸」(図9)「トルソⅡ」(図15)

「雲の記憶 一空人」(図16) 6票

⑨「海の記憶」(図17)「風の記憶」(図19) 5票

⑩「雲の記憶 一窓」(図13)「雲人」(図13)

「NANA」(図24) 3票

⑪「雲の記憶 一臨」(図3)「トルソ」(図21)

「旅の記憶 一白壁」(図22) 2票

⑫「雲の 一秋空」(図12)「NANA」(図23) 1票

ちなみに、2012年の学内展示では以下の通りの結果であった。

①「雲の記憶—祈人—」(図7) 72票

②「双眸」26票

- ③「残されたかたち」(図1)、「風と雲と希望と」(図4)、「雲をかぞえる人」(図10)、「想」、「残されたかたち」(図1) 20票
- ④「環 一冬一」14票
- ⑤「雲の記憶」(図6) 8票

#### 4. 考察

今回の展覧会は、「あつぎアートギャラリー4」(50平方メートル)において開催したが、等身大の作品が4体、半等身大の作品が4体、小品が11体、レリーフが4体の計23体の作品を並べた為、アンケートでも指摘されたように、「作品の数が空間に対して多すぎ」たようだ。

等身大と半等身大、小品作品のバランスも関係するが、全体として2/3程度、つまり「50平方メートルに対して16体」が最適数であったと考えられる。

鑑賞者数は、前回2012年の個展と比較して少ないが、幅広い年齢層が訪れてくれた。鑑賞者数が少ない要因としては、開催時期と、同時開催された展覧会が関係していると考えられる。開始時期は8月13日～19日であったが、帰省やお盆の行事と重なってしまった。また、Gallery1～3は、通常であれば厚木市内の芸術団体による開催内容であったのが、今回は厚木市による招待作家による特別企画となっており、厚木市在住の発表者同士による鑑賞の相乗効果が確保できなかったと考えられる。

また、厚木市以外から来場されている方が全体の55%と、市内の鑑賞者よりも多い事がわかった。Gallery1～3が、通常通り厚木市内の芸術団体による開催内容であれば、この結果が逆転していたのではないだろうか。また、小田急沿線上に沿って来場者数が多い事もアンケートより伺えたが、必ずしも距離や利便性が来場要因の全てでは

ないという事がわかった。

鑑賞者に関しては、10%の方が「これまで展覧会を訪れた事が無い」という結果であった。これにより本展覧会では、普段展覧会に訪れないという1割の方達に対し、作品鑑賞の機会を与える事ができたと考えられる。加えて、展示について「良い」という回答が全体の約90%であったことから、展覧会について好意的に捉え、興味・関心を持っていただけたと考えられる。

「厚木市に美術館やギャラリー等の展示施設がある事についてどう思うか」という質問に対しては、「良い事だと思う」が97%で「不明」が3%であった。この事から、会場に訪れた方々は、厚木市に作品発表の場が設置され、市民として芸術を推進したり、施設を主体的に利用したりする事について関心が高い事がわかった。

次に、年間数体ずつ制作してきた作品を、まとめて展示した事により、気付く事ができた点について述べてみたい。

まず、今回の展覧会において好評を得た上位4作品(3位が同票数だった為)についてであるが、1位は「雲をまとう人」(図2)であったが、等身大や半等身大の像を差し置いて、高さ30cmの小品がトップであった事は意外な結果だった。しかし、緩やかに連続するカーブを描く大らかな輪郭線と、異なる種類の画材を塗り重ねる事により生み出された複雑な彩色が、鑑賞者の心を惹き付けたと考える。

次いで選ばれたのが「雲をかぞえるひと」(図10)であった。空を流れる雲を表現する為、人体像の背景に設置した高さ2mの板の上部に、欄間の様に雲を透かし彫りした。鑑賞者は雲の部分よりも、板一面に広がった鑿跡に感心していた。日本人は鑿跡による規則性およびその仕事量に強く惹き付けられると感じた。

3位は「雲の記憶」(図6)と「双眸」(図9)であっ

た。「雲の記憶」は高さ180cmの大きな作品であるが、顔が空を見上げる形になっているので、鑑賞者は正面に立った時、顔の表情を観る事ができない。「雲の記憶」と同様、7位の「残されたかたち」(図1)も、顔の表情は鑑賞者から見る事ができない。顔が見えない事により鑑賞者が想像して観る余地を残している事が、これらの作品の魅力となっていると考えた。

「双眸」は「雲をかぞえるひと」と同様、背景のある作品である。どちらも日本人のイメージする「かたち」の根本には、道祖神や地藏仏があると仮定して制作したものである。鑑賞者数名の方々から、宗教的な印象を持ったとの声をいただいたので、それが肯定的な印象に繋がったと考えた。

ちなみに、3位の「双眸」は2007年に制作したものであるが、以降、異なる素材との組み合わせによる表現が増えてきた。「双眸」では、人体をより際立たせるのが目的であったが、これが次第に変化してきた。2009年「雲をかぞえる人」(図10)や、2010年「風と雲と希望と」(図4)では、背景は単に人体を際立たせるための装置ではなくなってきた。そして、背景自体に意味を持たせるようになり、人体との空間表現を試みたり、絵画的要素や物語の要素を加えたりする事となったのである。人体像と背景の調和が今後の課題となる。

さらに今後の課題として、光と陰を強調し、立体としての強さを打ち出していく必要があると感じた。加えて、アンケートの中でご指摘いただいたように、鑑賞のための空間に気を配り、作品と鑑賞者が良い時間を共有できるよう、研鑽を積んでいきたい。

## 5. さいごに

2008年、筆者は「厚木市新総合計画提言書」作成にあたり「学術経験者」として、大学より推薦

いただきました。その際「教育・生涯学習・スポーツ・文化」分科会リーダーとして、美術館やギャラリーなどの文化施設の設置を要望致しました。そして2014年、「厚木市民交流プラザ」に「ギャラリー」が設置されました。

この結果を受け、私は厚木市に対し感謝の意を表したいと思い、その気持ちを形にする事が、今回の個展開催に挑戦するきっかけとなりました。しかし、その気持ちとは裏腹に、開催前の手続きから、展示台や照明機材の件、展覧会終了後の後始末まで、厚木市職員の皆様には微に入り細に渡って、お手数をおかけいたしました。

また、日頃よりお世話頂いております大学関係の皆様、学生ならびに卒業生の皆様には、ご協力、ご高覧いただき本当にありがとうございました。さらに、遠くよりお越し頂きました皆様、アンケートにご協力いただきました皆様、叱咤激励いただきました皆様に、深く感謝申し上げます。今後も、制作活動と教育活動に精進して参りたいと存じます。

## 註

- 1) 旧二科会の活動を第一期とし、戦後新しく、美術の第2の紀元を画するの意のもとに第二紀会を創立。その後、会の発展とともに名称を二紀会と改めた。
- 2) 横浜美術協会展は「ハマ展」の愛称で親しまれており、戦前に開始された歴史のある展覧会。戦中は休会していたが、戦後再開した公募展で、北海道展と並ぶ程の大規模な展覧会である
- 3) 筆者はこれまで、「アドベントヒルズ」(青森県弘前市)、「ギャラリー・だうランド」(秋田県大館市)にて個展を開催してきた。
- 4) 筆者はこれまで、「大島画廊」(新潟県上越市)、「gallerey うえずみ」(日本橋)、「アトリオン」(秋田市)、「サロン・ド・G」(銀座)、「アートスペース・イワブチ」(横浜市)「ギャラリー華」(南麻布)にてグループ展に参加してきた。

- 5) 筆者は2012年「ソニー学園湘北短期大学図書館」(神奈川県厚木市)にて個展を開催した。「テラコッタ彫刻 in 湘北短期大学図書館 一個展開催における造形教育との関わりと可能性―」湘北短期大学紀要34号参照。
- 6) 2014年、厚木市は市民協働推進部 文化生涯学習課管轄による「あつぎ市民交流プラザ」を設置、文化・芸術・生涯学習の為の活動スペースや、子育て支援センターの拠点とした。「あつぎアートギャラリー」は、その一環として設置されたもの。筆者は2010年、厚木市将来構想委員会「楽しい町づくり班」に所属し、美術館やギャラリー等の展覧会場設置について、市民の代表として取りまとめ、市長に対しプレゼンテーションを実施している。
- 7) 文部科学省は、平成21年学習指導要領において「美術」の科目目標を「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」としている。
- 8) あつぎ協働大学は厚木市と市内にある5つの大学(神奈川工科大学・松蔭大学・湘北短期大学・東京工芸大学・東京農業大学)が、平成20年に締結した包括協定を活用して、さまざまな内容の講座を開催し、市民が学習する機会を提供している。これまで1万人以上が受講している。
- 9) 森崎巧一氏(同大学講師)と協同研究の為、動物彫刻の制作依頼があった。筆者は制作過程を記録し、森崎氏が形式に整えたものをWebにupし、さらに作家サイドからコメントを入れて作成した。現在、下記Web上で公開されているが、今後もさらなる展開について検討中である。「犬の彫刻」2015年1月7日アクセス(<http://media.shohoku.ac.jp/member/morisaki/sculpture.html>)
- 10) 横山徹氏(現在「二紀会」委員、青山学院大学教授)のアトリエ横山にて秦野市教育委員会後援事業の一環として開催。

「あつぎアートギャラリー」での個展開催を通して



1. 残されたかたち

テラコッタ、石膏、木  
H160 W60 D60  
2009 第 65 回記念横浜美術協会展



6. 雲の記憶

テラコッタ、石膏、木  
H180 W60 D60  
2010 第 66 回横浜美術協会展



2. 雲をまとう人

テラコッタ、石膏、木  
H30 W20 D15  
2013 緑の中の小さな彫刻展



7. 雲の記憶 一祈人一

テラコッタ、石膏、木  
H140 W140 D70  
2011 第 65 回二紀展



3. 雲の記憶 一臨一

テラコッタ、木  
H50 W30 D30  
2012 緑の中の小さな彫刻展



8. 木漏れ日の記憶

テラコッタ、石膏、木  
H70 W50 D40  
2013 第 69 回横浜美術協会展



4. 風と雲と希望と

テラコッタ、石膏、木  
H90 W40 D30  
2010 第 10 回二紀展春季展



9. 双眸

テラコッタ、石膏、木  
H70 W50 D40  
2007 神奈川二紀受賞作家展



5. 旅の記憶

テラコッタ、石膏、木  
H120 W40 D50  
2014 横浜美術協会受賞者会員展



10. 雲をかぞえる人

テラコッタ、石膏、木  
H200 W200 D150  
2009 第 63 回二紀展



11. 雲の記憶-秋日-

テラコッタ、石膏  
H50 W30 D30  
2013 ニ紀同人展



16. 雲の記憶-空人-

テラコッタ、石膏、木  
H50 W20 D20  
2012 横浜美術協会受賞者会員展



12. 雲の記憶-秋空-

テラコッタ、石膏、木  
H50 W30 D30  
2007 SOUKI TEN



17. 海の記憶

テラコッタ、石膏、木  
H15 W25 D10



13. 雲の記憶-窓-

テラコッタ、木  
H50 W30 D30  
2012 緑の中の小さな彫刻展



18. 雲人

テラコッタ、木  
H15 W25 D10



14. NANA

テラコッタ、木  
H15 W10 D10



19. 風の記憶

テラコッタ、木  
H30 W15 D15  
2014 絆の아트展



15. トルソⅡ

テラコッタ、木  
H50 W20 D5



20. 雲の記憶-一月夜-

テラコッタ、木  
H30 W20 D15  
2012 緑の中の小さな彫刻展

「あつぎアートギャラリー」での個展開催を通して

The report of private exhibition  
“Shuhei Otsuka exhibition at Atsugi art gallery”.  
- A reflection on the relationship between art education and private exhibition -

Shuhei OTSUKA

**[abstract]**

An exhibition was held at an established newly “Atsugi art gallery” in 2014.

I tried to enjoy fine arts and bring up loved sentiment by making the chance to appreciate terracotta sculpture works to citizen in Atsugi, students of Shohoku junior college, a teaching staff member of college and many persons. And another purpose is the case that an author reconsiders the former work and considers directionality of the next production.

**[key words]**

Education through arts, Terracotta sculpture, Solid modeling, Appreciation education, Lifelong study